

---

# **緋弾のアリア～灰色の武偵 鎌鼬～**

クロンボ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

緋弾のアリア～灰色の武偵 鎌鼬

### 【Zコード】

N9179Y

### 【作者名】

クロンボ

### 【あらすじ】

武偵を色で表すなり『白』。武偵の敵なら『黒』。

しかし、そのどちらにも属す武偵がいた。彼は『灰色の武偵』。

原作沿いに進めて行く予定です。

## オリキャラ設定

平川信（ひらかわ まこと）

東京武徳高校2年A組 専門科目は装備科

本名、平信たいら まこと

平家の末裔だが、歴史上では滅亡したため名字を変えている。

元々、イ・ウーのメンバーであり、敵である源氏と行方不明である妹（今は大分検討がついてきている）を捜してくれるというのでイ・ウーに入つたが結局見つからなかつたので組織を抜けた。

耳と反射神経がよく、後ろから狙われても弾が空気を切り裂く音で分かるため避けることができる。

逆に目が弱く（視力は良い）カメラのフラッシュをくらつただけで一分は何も見えなくなる

携帯武器は

日本刀『鎌鼬』

『鎌鼬』は一振りすると矢前通り、鎌鼬を起<sup>おこ</sup>すことができる。

トカレフ<sup>トトロ</sup> - 33

## 第〇弾（前書き）

この話ではオリキャラは登場しません。

次話からです

## 第0弾

東京武徳高校第三男子寮

・・・ピン、ポーン・・・

・・・ピン、ポーン・・・

(誰だ・・・?) こんな朝っぱらから・・・いや、あのチャイムの鳴  
らし方)

キンジは睡い皿をこすり、ドアを開ける。

「白雪・・・」

「キンちゃん!」

何しにきたのかは大抵想像できる。

「ひつや、ひつや、弁当を届けに来たよつだ。」

「・・・でわざわざ弁当を届けに? 大変だつたら」

「う・うん。そんなことないよ。

昨日まで合宿行って春休みの間何もお世話できなかつたから……

「

星伽白雪、俺の幼馴染みで代々続く星伽神社の巫女さんだ。しつかり者の大和撫子だ。

「まあ……ありがとう」

「キ・・・キンちゃんもありがとひびきこます」

「何でお前があつがとうなんだよ」

「だ・・・だつてキンちゃんが食べてくくれてお礼まで……」

白雪は深くお辞儀する。

深くお辞儀したせいで黒の下着が見えてしまつたのだ。

ダメだ。俺は禁止しているんだ。ああいうのを。

「はい、防弾制服と拳銃。今日から一緒に2年生だね

「始業式くらい銃は大丈夫だろ」

「ダメだよ、校則なんだから。それに……また“武僧殺し”みた

いなのが出るかもしれないし・・・

“武僧殺し”？でもあれは逮捕されたんだろ？

「で・・・でも模倣犯とか出るかもしれないし今朝の占いでキンちゃん女難の相が出でたし・・・」

田畠の占いはよく当たる。

「分かった、分かったつ

俺はちゃんと銃と携帯ナイフを装備した。

「キンちゃん・・・カツコいい。やっぱり先祖代々の『正義の味方』つて感じだよ。」

「・・・やめてくれよ

正義の味方なんかじゃなくていい。

「俺はメールチェックして出るから。先行ついてよ。」

「はいっ

俺は普通に平凡な人生を送りたい。

だからまづは転校してやるんだ

このトチ狂った学校から

## 第一弾（前書き）

オリキヤ「登場します。」

## 第1弾

「げ、58分のバス間に合わねえじゃ ねえか」

生涯俺は今朝7時58分のバスに乗り遅れたことを悔やむだらう

なぜなら

『そのチャリには爆弾が仕掛けちゃがります。チャリを降りやがつたり減速させやがると爆発しやがります』

東京武蔵高校2年探偵科遠山キンジ

今、俺は世にも珍しい『チャリジャック』に遭っている

並走するセグウェイには9ミリ短機関銃

サドルの下にはプラスチック爆弾

(・・・死ぬのか?こんな所で死ぬのか俺)

ふと前を見ると人影があった。

その人影は次第にはつきりしてきた。

日本刀を手にしている少年。

「信！危ないから俺から離れろ！」

「黙れ・・・」

信と呼ばれた少年は刀を抜くと大きく振った。

「『鎌鼬』発動！」

少年のかけ声ともにセグウェイはバラバラになつた。

キンジはこのまま、助けてくれるかと思ったが信が突然現れたセグウェイ10体ほどに囲まれてしまった。

「キンジ・・・後は頑張れ」

頼みの綱が切れてしまつた。

どうする・・・

なんとなくだが、上を向いた。近くの建物の上には女の子がいた。  
そして、

「飛び降りた！？」

パラシュートを使って徐々に近づいてくる。

「バカ、来るな！この自転車には爆弾が

」

「武道憲章1条！』仲間を信じ仲間を助けよ

いくわよ。」

俺を助けるつもりか？でもどうやって

少女はパラシュートに足をかけ逆さまになつた。

(マジかよ・・・・あの逆さまの体勢で受け止める気が?)

「まひ、バカっ、全力で！」

「バカはそっちだ！こんな助け方あるか？！」

(でももしかして俺に方法もねえ。やるしかない！)

少女はキンジだけ受け止めると自転車から離れた。減速した自転車は爆発し、一人を遠くへ飛ばした。

なぜなら空から女の子が

生涯俺は今朝7時58分のバスに乗り遅れることを悔やむだらつ

神崎・H・アリアが降つてきてしまったんだから。

時間は少しさかのぼり、

セグウェイに囲まれた信は、

「あいつ、 どんだけ用意してんだよ」

（囲まれた状態で攻撃したら蜂の巣にされるだけだ）

信はジャンプをして、 セグウェイの中から抜け出した。

セグウェイは勿論撃つてきたが防弾制服の為問題はない。

そして、 また刀を抜いた。

「『鎌袖』発動！」

信は刀を振るとセグウェイが3体ほどバラバラになった。

「ひつ」

舌打ちをすると今度は拳銃を取り出しセグウェイ2体を撃ち抜いた。

拳銃をしまい、 刀を両手で持ち直すと

「ラスト・・・『鎌鼬』発動！」

そして、5体を壊し、終わった。

信は刀をしまい、歩き出した。

歩きながら、携帯を出すと、ある人物に電話をかけた。

「おい。」

「せつかくのシナリオを台無しにする気?」

「別に大丈夫だった。お前がセグウェイ10体も送つてきたんだからよ。」

「でも流石にやりすぎだったんじゃない?キンジ死にそうだつたらじやねえか。」

「大丈夫、大丈夫。一人をくつつけるための序章だからまだまだ序の口だよ。」

「まだやる気なのかよ。」

「くふつふつ。まだまだ続くよ。とまあ、平信また後で。」

「その呼び方はやめろ・・・って消しやがったか」

このままじゃ始業式に間に合わねえな。まあいいか。

あの2人は無事なのか。

遠山キンジ・・・神崎・H・アリア・・・

## 第2弾

「…………？」

たしか爆発に巻き込まれて……

どうやら絶していただしこ。

「…………あれ、セイ君の…………女の子へ」

(近づく！)

キンジと女の子の顔の位置はわずかにズれているだけだ。

(ダメだ。禁止なんだよこいつのせ。)

「お…………おい、起きあがよ。」

俺はこの子に助けてもらつた後の爆発で体育倉庫に突っ込み、跳び箱の一端田を吹つ飛ばして中にハマつたらしい。

わざから俺の田の前にあるプラスチック板だけどなんだ？

(…………名札？『神崎・H・アリア』でもなんでこんな位置に……)

)

それは、制服が上がっているせい為であり、制服が上がっているせいでキンジは“爆弾”を見てしまったのだ。

(だ・・・大丈夫、このサイズならセーフだ。)

これは不幸中の幸いだったかも知れない

もし二の胸がもっと大きくて顔に押しつけられたりしていたら有無を言わさずあの・・・

「・・・へ・・・へンタイ!!--」

「・・・あ」

起きてしまった・・・

「さ・・・わわ・・・っサイテーつ!!--」

「つてッ」

アリアはキンジをひたすら殴り続けている。

アリアはさつきの出来事は事故ではなくキンジの仕業だと思つているらしい。

「「」のチカソ!恩知らず!人でなし!!--」

「ち・・・違う!」これは俺がやったんじや

ガガガガガ！

突然、体育倉庫内に大きな音が鳴り響く。

「まだいたのねっ！？」

「『いた』って何がだ！」

「『武偵殺し』のオモチャよ…」

(“武偵殺し”じゃあさつきの銃撃は )

「あんたも戦つて！向こうには7台いるわ。これじゃあ火力負けする。

」

「な・・・」

( ムリだ。今の俺”では何もできない )

ガアンッ！

アリアは跳び箱にある隙間から狙つて撃つている。

狙つて撃つているのだから当然前のめりになる。キンジの顔がアリアの胸にうずくまっている・・・

“アウト”だ。タブーを破ってしまった

(ああ・・・)の感覚、なつてしまつ。なつてしまふ。“あのモード”

“モード”

「 やつたか」

「射程圏外に追い払つただけよ。ヤシラ並木の向いに隠れたけど。  
・

やつとまたすべ出でへるわ

「 強い子だ。それだけでも上出来だ。」

ああ

なつてしまつた

「(い)瓊美こちよつじだけ

お姫様にしてあげよつ」

“ヒステリアモード”に

キンジは飛び箱から出で、アリアをマットに座らせた。

「 ・・・な、な、なに・・・?」

「姫はそのお席で(い)やつへつ

「あ・・・アンタビうしたのよー? おかしくなひちやつたのー?」

ズガガガガンツ!

再び倉庫内に響き渡る銃声。

「あ・・・危ない、撃たれるわー!」

「アリアが撃たれるようすつとこられ」

「せつしきからなんなの。 なに急にキャラ変えてんのよー? 何をする  
気ー?」

「アリアを

市乃

キンジはセグウェイフ台の前に立つ。

見える

照準は全て俺の頭部か

いい狙いだ

だが

当たらぬーー!

キンジは銃弾を全て交わし、発連射する。しかも、その7発は全てセグウェイの銃口に入る。

そのままセグウェイは壊れた。

「・・・す、凄い。あいつ・・・何者なの・・・」

キンジが後ろを振り向くと、アリアは跳び箱の中に入っていた。

「・・・お、恩になんか着ないわよ。あんなオモチャぐらいあたし一人でも何とかできた」

アリアは爆風で壊れたと思われるスカートを直そうとしながら話す。

「そ・・・それに今までさつきの件をいやむやにじょうたつてそれはしないから！」

あれは強制猥褻！レッキとした犯罪よ！――

「・・・アリア。あれは不可抗力つてやつだよ」

キンジは自分のベルトを取り、アリアに渡した

「あ・・・あが不可抗力ですつて！？」

ベルトをつけたアリアはキンジの下へ行き、怒鳴った。

「あ・・・あたしが気絶してゐるスキに」

キンジとアリアが色々やつてゐるとこひを平川信は見ていた。

「『HABA』（ヒステリア・サウ、アン・シンドローム）・・・」

そんなことを言つてこるとキンジが倉庫内から投げ飛ばされてきた。

その後にアリアが出てくる。

（ヒステリアモードのキンジと強襲科のランク武僧アリア。どっちが上か見ものだな。）

拳銃の後は刀か。

「強猥男は神妙に

わおきやつー？」

キンジの撒いた銃弾に足を滑らせるアリア。

そして、もう一度。

「い・・・いのシ・・・

みやおわせつ……。」

アリアは常人離れした戦闘力を持っている

だが今は怒りと羞恥心でれいせいさを欠いている。対する俺は“ヒステリアモード”

たとえ100人のFBI捜査官からだって逃げ切れる。

「『』の卑怯者！逃げるな！」

でっかい風穴あけてやるんだからあ……」

これが俺遠山キンジと後に『緋弾のアリア』として世界中の犯罪者を震え上がらせる鬼武偵、神崎・H・アリアとの硝煙の二オイにまみれた最低最悪の出会いだった。

さて、始業式はすっぽかしちゃったし教室行かないとな。

俺がそんなことを考へてると横から刀が伸びてきた。

「・・・信

「『』HIIHIIのお前に俺がど『』まで通用するか試してみたかった。」

「何で知ってるかは知らないけど今からやるか？」

「いや、やうやう『通常モード』に戻つてしまつだろ？今までのお前を見てきたら長くても數十分しか保つてない」

「良く知ってるな。『武偵は自分で情報を集めて推理する』ってか

「ああ。だが、また今度の時にしてもいいよ。

ちなみに同じクラスだった。よろしくな

それだけ言つと、信は校舎に向かつて歩き出した。

### 第3弾

2-Aにて

「いよいよ。喜べ、キンジー。今年も車輌科の武藤剛氣さまが一緒に  
クラスだぜ・・・」

キンジは完全に沈んでいた。

「星伽さんと別の

「・・・武藤、今こそいつに女の話題を振るな」

信が窓際の一一番後ろといつベストの席から来た。

「平川君。おはよう。」

武藤の後ろから一人の少年が現れた。

「ああ、不知火。おはよう。」

「とにかく今、女の話題を出したらいけないってことだ。」

そう言つとやうび先生が入ってきた。

「はーい、皆さん。席についてください。2年生最初のHRをはじめますよー

まずは去年の3学期に転入してきたカーワイイ子から自己紹介してもらいます。」

キンジ、信にとつては見覚えがある顔が立ち上がった。

「強襲科の神崎・H・アリアちゃんとーす」

驚きのあまりキンジが椅子から落ちた。

「どうしたの? 遠山君。」

「・・・い、いえ。別に」

「先生、あたしはあいつの隣の席に座りたい」

この発言を聞いたクラスメイトほとんどが一斉にキンジの方を見た。

「キンジ、良かつたな。何かお前にも春が来たみたいだぞ!」

「先生!俺、転校生さんと席変わります。」

「武藤君、ありがとう。じゃあ、神崎さんはそこの席に座つてねー」

拍手やなんやうこひこひ聞ひえてくる。

「キンジ、じれさつきのベルト」

キンジがベルトを受け取ると隣の席の『峰理子』が立ち上がった。

「 分かった!!

理子、分かつちゃったー!」<sup>れフラグぱつきまきこ立てるよーー。</sup>「

・・・コイツは探偵科ナンバーワンのバカ女だ

「キーくん、ベルトしてない!そしてそのベルトをツインテールさんが持つてた!

これ謎でしょ、謎でしょーー?」

口クな推理の予感がしない

「でも理子には推理できちやつた!

キーくんは彼女の前でベルトを取るような“何らかの行為”をした  
!そして彼女の部屋にベルトを忘れていった!

つまり二人は

熱い熱い恋愛の真つ最中なんだよーー!」

わーわーわー

今、教室は「コンサート会場のよつに大盛り上がり中。

あちこちでほめ言葉だつたり非難の声だつたり聞こえる。

「お・・・お前らなあ・・・」

ズギュンッ！

アリアは拳銃を握り教室内で発砲した。

その発砲で教室は一気に静まり、一番盛り上がっていた理子は変な動きをして席に着いた。

「れ・・・恋愛だなんてくつだらない！全員覚えておきなさい！  
そういうバカなことを言つヤツには・・・

風穴、あけるわよー！」

時間も経ち、放課後

「では今日の授業はここまでです。皆さん、くれぐれも不注意な行動及び発砲は控えるよつ・・・」

先生が話している途中だったがほとんどの男子生徒の目がキンジに

向けられた

「キンジ待てッ」

キンジは上手くベルトとワイヤーを使ってベランダから飛び降り逃走した。

「へそつ逃げられたッ」

「しゃーねえ奴だなあ。ねえ、神崎さん。あいつ異性の話になるといつもああで・・・あれ?」

武藤が話しかけた時にはアリアはすでに居なかつた。

そのアリアはと黙つと

信は第一グラウンドへ来ていた。

信は第一グラウンドへ来ていた。

「・・・おい、いい加減姿を現したらどうだ。」

「流石ね。その様子だとあたしに気付いてグラウンドに来たみたいね」

「あんな。で、何のよつだ?」

「あんたに聞きたい」とあるのよ。」

信は全く見当がつかず、頭に『?』を浮かべたがそのまま聞き返した。

「キンジのチャリジャックの時よ。あんたは直ぐにセグウェイを壊した。何でその時、キンジを助けなかつたのよ。」

「それを見てたつてことは知つてるだろ?俺はあの後、セグウェイに囲まれた。無理があるだろ?」

「でも、あんたの実力だったらできたんじゃない?全部は無理でも何台かは。」

ちつ、なかなか鋭いな。流石は“あの人”の末裔だけはあるな・・・

「でも、俺はBランクだし弱いから一〇台も倒せねえよ。」

「じゃあ、何で今ここにいるのよ。」

かなり鋭い。まずい答えを言つてしまつた・・・

「本当に弱いがどうか見せて貰おうかしら。」

アリアは俺に向いていきなり発砲してきた。

俺はとつさに交わす。

「アブねえな。何すんだ。」

「あんたが弱いって言つから確かめたのよ。」

『確かめたのよ』って初めから狙つてるだろ。今、頭すれすれだつたぞ。

・・・仕方ない

俺は刀を抜く。

それに合わせてアリアも刀を抜く（＝刀流）。

「こざり、真剣に勝負！」

「信、あんたの本気見せなさい！」

俺たちは刀どうじでぶつかり合つ。俺の場合は主要武器が刀なので有利かと思うが対するアリアは「刀流なので実力はほぼ互角。

（へつ、流石はうランク武僧。一筋縄では行きそうがない・・・）

（ここまで刀を使ひこなす奴なんて初めて見たわ・・・）

（（「トイツやれる！－！）

二人は一度離れ、距離をとる

アリアは再び襲いかかってくる。

信は刀を大きく構える。そして、大きく一振りする。

「『鎌鼬』発動！」

「さやあ！」

アリアは吹き飛ばされたが尚も立ち上がる。

（今ので仕留められなかつたのは痛いな・・・）

『鎌鼬』には弱点がある。鎌鼬を作る時には溜が必要になるのでその溜の時間に攻撃されると終わりだ

（アリアが気付いているかどうかだな・・・）

信は再び構え直す。

「『鎌鼬』発動！」

「そこ！」

アリアは発砲していく。とうとう避けるが避けきれず弾が一発当たつた。

「へへへ・・・・・」

(やつぱり、気付いていたか・・・・)

俺は刀をしまい両手を擧げる。

「何のマネよー!」

「・・・降参

「何勝手に止めてるのよー!」

「武偵同士だ。流石に血は流したくはない。」

「・・・まあ、いいわ。これであんたの実力ははっきりしたわ。でも、まだ何か隠してるんじゃないの?」

「・・・別に」

「・・・あんた、キンジの部屋知ってる?」

「ついてくるか?教えてやるよー!」

一人はキンジのいる第三男子寮を目指す。

## 第4弾（前書き）

いつも更新です。

この小説を見てください。皆様お待ちせしました。

## 第4弾

第三男子寮へと戻つて来たキンジは今朝のチャリジャックのことを思い出していた。

あれは本当に何だつたんだろう。イタズラにしては悪質すぎる。あの『武偵殺し』の模倣犯は爆弾魔だ

爆弾魔は無差別に爆発を起こし人々の注目を集めてから世間に自分の要求をぶつけるのが一般的である

となるとあれはたまたま運悪く俺のチャリに仕掛けられたものなのだろうか

それとも俺個人を狙つたものか、だが何の恨みで？

ピンポンピンポンピポピボピボピボピボピボーン

チャイムがしつこく鳴り響く

「あーもう、うっせえなー放課後ぐらい静かに」

「遅いっ！…あたしがチャイムを押したら五秒以内に出る」と…。

「か・・・神崎！？と信…？」

「アリアでいいわよ」

アリアはキンジの断りもなく部屋に勝手に入つていく。

「待て、勝手に入るなっ！」

「邪魔する」

「お前もだー信」

アリアのトランクを持って信は奥に入つていく

「あんた達に話があるのよ」

「え？」

「キンジー！信ー！あんたたちあたしのドレイになつなさーー！」

「ありえん。ありえんだる、コイツ

いきなり家に押しかけてドレイになれだ？

「・・・それは無理だ。俺は『灰色の武僧』。使命を果たすまでは  
パーティーは組まない」

「灰色の武僧？何ソレ？よく分かんないけどあんたもこいついて

それよりも、キンジー！あと飲み物ぐらい出しなさいよー。

「ヒーヒー！ヒスプレッソ・ルンゴ・ドッピオー！砂糖はカンナ！一分

以内!」

(・・・なんだ。その呪文)

もうひん、そんなものは無くアリ亞と信じられたのはインスタン  
トである

「ハれローハー?」

「それしかないだから有り難く飲めよ

「・・・へンな味、ギリシャローハーによつと似てる。・・・ん  
ーでも違つ・・・」

「味なんかどうでもいいだ。それよりだ

今朝助けてくれたこと感謝してる。それに、その・・・お前を  
怒りすよつな事を言つてしまつたことは謝る

でも、だからってなにで申し訳しかけてくる?」

「分かんないの?」

「分かるかよ」

「あなたならどうに分かること無かったのに

まあこいわ。そのうか、思い当たるでしょ」

アリアが寝るよつた姿勢になり一瞬ドキッとするキンジ

「おなかすいた。なんか食べ物ないの？」

「ねーよ。」

「ないわけないでしょ。あんた普段なに食べてんのよ

「食に物はいつもアのコンビニで買つてる」

「ああ、あの小さなスーパーのことね。じゃあ、行きましょ

「じゃあってなんだよ」

「バカね、食べ物を買ひに行くのよ。もう夕食の時間でしょ？」

(会話がかみ合つてない・・・)

アリアはソファから飛び降りてキンジに顔を近付けた

「ねえ、そいつて松本屋の『ももまん』売つてる? あたし、食べた  
いな」

武僧が氣をつけなければいけないものがある。“闇”“毒”“女”

アリアは黙々と食べる。今、五個田である

ももまんとは一昔前にブームになつた桃っぽい形をしたただのあんまんだ。

「・・・ていうかな、ドレイつてなんだよ。どつこつ意味だ」

「強襲科であたしのパーティーに入りなさい。そこで一緒に武偵活動をするの」

「俺は強襲科がイヤで一番マトモな探偵科に転科したんだぞ。それなのに、あんなトチ狂つた所に戻るなんて ムリだ」

「あたしこはキライな言葉が三つあるわ」

「聞けよ、人の話を」

「『ムリ』『疲れた』『面倒くさい』」の三つは人間の持つ無限の可能性を血ひ押し留める「よくない」言葉

あたしの前では「一度と言わない」と、こいわね？

キンジのポジションは そつねあたしと一緒に前衛がいいわ

フロント前衛とは武偵がパーティーを組んで布陣する際の前衛。負傷率ダンツの危険なポジションである

「よくない」なんで俺なんだ

「もちろん言もよ」

「話聞け！」

「さつきの話聞いて無かったのか？パーティーは組まないって。クエストは別だが・・・」

「キンジは質問ばかりの子供みたい。仮にも武僧なら自分で情報を集めて推理しなさいよね」

この時、二人はこう思った

駄目だ。こいつとは会話のキャッチボールが成り立たない

「とにかく帰ってくれ俺は一人でいたいんだ」

「分かった。邪魔したな」

信は素直に帰ろうとするトアリアが飛びついて来た

「ダメー！あんたもあたしのドレイなんだから帰つたらダメー！」

「アリアー！止めるな！信、そのままアリアを連れて帰れ！」

「・・・キンジ、諦めろ。俺には無理だ

と言つて今日は泊まらせてもいい。アリアも初めからその気みた  
いだし・・・」

「は！？」

「まだ分からないか？あのトランク」

(あれ宿泊セットかよシ――)

「と云かく

「……出でた――」

「……な

キンジが『玉代ナ』と叫おうとしたが先にアリアが言つてきた

「なんで俺が出て行かなきゃいけないんだよ――」

「うるせー。しまへく戻つて来るな――」

「……出みづ、キンジ

キンジは再びトロコンビニへ行き、時は夜風に当たると別の場所へ行った

キンジ side

何故、俺が追い出される?

と云つかなんで俺を強襲科に戻そとするんだ

一体何が目的なんだ?

俺は一体どっちの味方につけばいいのか

白黒はつきりしない、どちらにもつく。俺はずるい人間だ・・・

アリアに仲間になれと言われた時には驚いた。だが、あいつの気持  
ちを考えるとアリアに手を貸す訳にはいかない

やつぱり俺は『灰色』だ・・・

( ( そろそろ戻つてもいいか・・・ ) )

二人は再び寮に戻ろうとする

キンジが扉を開けて中に入る

( ・・・ あれ。 あいつの気配がしない・・・ ? )

・・・ よかつた。 よく分からぬが帰つてくれたらしい

買つてきた物をテーブルに置き、手を洗いに洗面所に行く

( なんだ、風呂にいたのか・・・・・ 風呂お！？ )

・・・ああ、風呂に入りたかつたから俺たちを外に出したのか

ピン・・・ローン

「の慎ましいドアチャイム・・・白雲ー?」

ありえん、ありえんだろこの展開

「」は居留守を・・・

しかし、足を滑らせドアに体を当ててしまった

「つあつー?」

「キ、キンちゃん大丈夫!ー?」

「だ、大丈夫」

仕方なしにキンジはドアを開ける

ドアを開けると和服姿の白雲がいた

「なんだよ。お前、そんなカツコで」

「あっ、これね。私授業で遅くなっちゃって……。キンちゃんに  
お夕飯をすぐ作って届けたから」  
夕飯ならさつき食つたばかりだが……

「イ、イヤだつたら着替えてくるよつ。着替えないで来ちゃつた  
んだけど……」

「いや、別にいいからッ」  
頼む……。早く帰つてくれ……

「ねえ、キンちゃん。今朝出てた周知メールの自転車爆破事件って  
・・あれ、もしかしてキンちゃん?」

「ああ俺だよ」

「だ・・・大丈夫! ? ケガとか無かつた! ? てつ、手当てさせて!  
!」

「俺は無事だからっ! !」

「は、はい・・・。それにしても、許せない。キンちゃんを狙うな  
んて・・・! 私、ぜつたい犯人をハつ裂きにしてコンクリ・・・じ  
やない、逮捕するよ! !」

「い、いいから・・・」  
「コンクリ?」

「武偵高ではドンパチなんて日常茶飯事だろ。この話はこれで終了  
!」

「は、はー……。でも、今夜のキンちゃんへんだよ?」

「へ、へんへんのが……」

「なんか……こつもよつ冷たい気が……」

「き、氣のせいだ! そんな」とやり用事! 用事は向だよつー?」

「これ……タケノコ! はん。お夕飯に作ったの。明日から合宿でキンちゃんの」はんじばりへ作つてあげられないから……」

「あ、おお! こつもあつがとうな。よし、用事は済んだ。まあ帰るつむ?」

「……やつぱつ、キンちゃんへんだよ?」

ヤバい、早くこの状況をどうとかしないと……

「キンジ、ヒ田雪? 向してるんだ?」

「うやく信が戻つて来たがこの状況に置いてはグッダタイミングとは言えない

「あ、平川君。ちよつと、キンちゃんに届け物したくて……」

「でも、悪いな。一度今の時間帯にキンジのベレッタのメンテ頼まれてるんだ。用事が終わったら早く帰つて頂けるとありがたい」

「キ、キンちゃん！ごめんなさい！そんな、大事なことがあったのに時間を引き延ばしたりして……」

「あ、ああ……。もう大丈夫だから。じゃ、じゃあな！」

キンジは信を中に入れ、扉を閉めた。

「信……。助かった……。ありがとう」「

「そんな大した事はしない……。気にするな」

キンジは直ぐ、我に帰り洗面所へ向かう

(何なんだ？)

事情を知らない信はキンジからタケノコ「はんを渡されたので、取りあえずリビングへ向かう

(早くあの拳銃と刀を取り上げておかねば )

がらりつ

時すでに遅し。アリアは入浴を終え、出てきた。

「へ、ヘンタイ……」

「ち、ちがッ……！俺はこの刀と拳銃を……！」

運はキンジに味方しなかつたのか、刀一本持ち上げると余計な物（下着）がセットで着いてきた

アリアとキンジはしばらく固まり

「死ねッ！！」

アリアはキンジの鳩尾と顔面に強力な蹴りを入れる

神様、一つ聞きたい。俺が一体何をした

## 第5弾

「バカキンジーほり、起きるわー。」

朝、人が気持ち良く寝ていたのにこいつは・・・

いきなり、鳩尾にパンチと顔面に蹴りなんて・・・

「何すんだ、このー。」

「朝ーはん出しなさいよー。」

「知るか！」

「お腹すべじやないー！」

「すかせ、このバカ！

信ーお前も手伝って、こいつにかしてくれー。」

キンジは上のベッドに視線を向ける。

しかし、信の姿はなく変わりに紙が一枚あった。

紙にはこいつ書いてあった

『キンジ、厄介事に巻き込まれるのは御免だから先に行く。アリアに何かされても自分一人で頑張れ。』

それから、登校時間はまじりしたほうがいいぞ。一応ここは男子寮だからな

b Y『信

「スキあり！」

「ぐおひーー！」

今度は背中に強力な蹴りを打ち込む

背中を蹴られた拍子にキンジの手から手紙が落ちる

「何これ？」

アリアは手紙を読みながら寝室を出て行くキンジを追いかける。

「そのままの意味だ。だから、お前先に出る」

「やだ、逃がすもんか！キンジはあたしのドレイだーー！」

アリアは逃がすまいと必死にキンジの腕にしがみつく

「は・・・な・・・せ、い・・・ー。」

アリアは抵抗するキンジに対し、噛みつく

「い、っただただだッー！」

キンジが時計を見ると7時58分に近づいていた

「い・・・いかん。バスに乗り遅れる・・・。」の、疫病神め・・・。

「

マズい、」のままではマズい。

今、俺はワケの分からぬ侵略者・アリアに日常生活を壊されつゝある

今の目標である『平凡な普通人』になるためにもまずは、平穏な日常をとりもどさねばならない

(・・・さて探偵科でクエストも受けたことだし)

武僧高では五時間目以降それぞれの科目に分かれて実習を行うことになつている

(アリアは強襲科で戦闘訓練を受けているだろう。その隙に俺はアイツの目の届かない所で抵抗運動を )

「キーンジ

「・・・・・なんで・・・お前がここにいるんだよ・・・

「あんたがここにいるからよ」

キンジはショックの余り膝から崩れ落ちる

「答えになつてないだろ。強襲科の授業、サボつてもいいのかよ」

「あたしはもう卒業できるだけの単位を揃えてるもんね。で、あんた普段どんなクエストを受けてるのよ」

「お前には関係ないだろ。Eランク武偵にお似合いの簡単なクエストだよ。帰れっ」

「あんた、今Eランクなの？」

「やうだ」

武偵高の生徒は一定期間の訓練の後いきなり民間から有償のクエストを受けることができる

で、それらの実績と各種訓練の成績に基づいて、生徒にはA～Eの『ランク』がつけられる。その上にはさらにSという特別なランクがあり入試の時、キンジはそのSランクに格付けされていた。ヒステリアモードのおかげでだが

「……ていうか。俺にどうせやランクなんてビリでもいいんだよ

「まあ、ランク付けなんて確かにビリでもいいけど。それより今日、受けたクエストを教えなさいよ」

「お前に教える義務はない」

「風穴あけられたいの？」

「・・・今日は猫探しだ」

半ば脅迫されたのでキンジは答える

キンジのクエストは青梅に行き、迷子の猫を探すこと。報酬は一万円。0、1単位分のクエストである

「ついてくんな」

「いいからあんたの武偵活動を見せなさい」

「断る」

「・・・そんなにあたしがキレイ?」

「大っキライだ!ついてくんな」

「もつぺん『ついてくんな』って言つたら風穴」

「・・・」

二人は電車に乗り青梅へ

「で猫探しっていうけど、あんたどうこいつ推理で探すのよ」

「別に。猫の行きそうな所をしらみつぶしに歩くだけだ。・・・て

「いつかお前に何か案でも出せよ」

「ないわ。推理は一ガテよ。一番の特徴が遺伝しなかったのよねえ  
ていうか、お腹へった」

「さつき昼休みだった。メシ食わなかつたのかよ」

「食べたけどへつたのつ。なんか、おひつてー」

（・・・こきなり足を引っ張りやがる）

所変わつて、武偵高

「さあ、信君。今日この手伝つてくれなのだ」

「ヤダ」

信に話しかけてきた人物。それは装備科アームドの中で一番優秀な生徒『平賀文』（ひらがあや）。有名な平賀源内の子孫である。

手伝ってくれと言つたのは車輛科ロジと合同で作つてゐるおもちゃ（改  
造模型）だ。

「他のヤツに手伝つてもうえ」

「他のみんなは手伝つてくれてるのだ。後は君だけなのだ」

「……断る。依頼されたメンテやら改造やら出来ない。」

「待つのだ」

「……まだ、何か?」

「どうしてもダメなら今回は力づくりで……」

と言つた平賀の後ろには装備科アームドと車輌科ロジの生徒たちがかなりいた

(……お前ら仕事しきよ) 結局、信は手伝わされる羽目になつた。

(……後で木つ端みじんにしてやる)

一方、キンジとアリアのその後は

二人は無事に猫を送り届けた後、寮に戻つた

夕食を済ませ、色々やって(キンジはやられて)寝た。

キンジはアリアが寝たのを確認した後携帯を開きメールをつつ

送信先は

『峰理子』

## 第6弾

武偵高にある植物園にて

「・・・理子。何のようだ」

「くふ。単刀直入に言つと、平信には少しの間アリアの奴隸になつてもらいま～す！」

「その呼び方止めろ・・・で、何でだ？」

「簡単に言えば潜入調査かな？アリアの下について行動を探つてくださ～い！」

「無理つて言つたら？」

「“あの子”の・・・」

「・・・分かつた。だから」

信の話を遮るように植物園の扉が開く。信は理子から離れ裏口から出て行つた

中に入つて来た人物はキンジだった

(信か?)

「キー／＼ーん！」

「相変わらずの改造制服だな。なんだ、その白コロコロコロ

「これは武道高の女子制服白口リ風アレンジだよー。キー／＼、いい  
かげんロリータの種類ぐらに覚えようよお」

「断る。それより、早く終わらせたい。もちろん、アリアには秘密  
だぞ」「

「ハー、ハジマーハー」

「ハハハあーーー。しほくひつー」と『白詰草物語』と『妹ゴス』  
だー！

袋の中にはギャルゲーが入っていた

「あ・・・。これとこれはいらなし。理子はいひこいつのキャライな

理子はいつも『妹ゴス2』と『妹ゴス3』をキンジに渡す

「なんでだよ。他と同じようなヤツだろ」

「ちがうー。』2』とか『3』なんて別称！個々の作品に対する侮辱！」

「……じゃあ、その続編以外のゲームをくれてやる

そのかわりアリアについて教える

「あいーー！」

「まずは強襲科アサルトでの評価を教える」

「んと、ランクはSだったね。2年で5つて数えるくらいしかないんだよ」

・・・だろうな。

チャリジャックの時のある身のこなし。どう考へても常人レベルじゃない

「それから、徒手格闘も上手くってね。流派はバーリー・・・バーリ  
ツウ・・・」

「バーリー・トウードか」

「そうそう。後ね、拳銃とナイフは天才の領域。どっちも二刀流で  
両利きなんだよ」

「それは知ってる

「じゃあ、2つ名も知つてる?」

「2つ名?」

「『カズラ双剣双銃のアリア』」

よく分からぬが4つ（カトロ）の武器を持つといふ意味の2つ名なのだろうか

「他には・・・アイツにどんな実績がある?」

「あ、それはスゴい情報があるよ。

アリアは14歳からロンドン武偵局の武偵としてヨーロッパの各地で活動しててね。・・・その間一人も犯罪者を逃がしたことないつて

「逃がしたことがない?」

信じられない。考えただけで寒気がする

「・・・体质はどうだ」

「うーんとね、アリアってお父さんがイギリス人とのハーフなんだよ」

「て、ことはクオーターか

「イギリスの方の『家』がミドルネームの『H』家」

「すうじく高名な一族らしいよ。おばあちゃんは『Dame<sup>デイム</sup>』の称号を持つてるんだって」

「じゃあ、あいつ貴族じゃねーか」

「もうだよ。で、他には?」

「いや、もういい」

キンジは自分の寮に戻った。

部屋に入るとアリアと信がいた

「遅い」

「・・・どうやって入ったんだ、お前ら」

「信に鍵を作らせたのよ」

「他人に作らせて勝ち誇った顔するな」

キンジは手鏡を持つて自分の髪を整えているアリアに向かって言い放つた

「さすが貴族様。身だしなみにもお気を使われていらっしゃるわけだ」

「・・・あんた、あたしのこと調べたわね？」

「ああ」

「本当に今まで一人も犯罪者を逃がしたことがないんだってな」

「いよいよ武偵らしくなってきたじゃない。・・・でも、こないだ一人逃がしたわ」

「へえ、凄いやつもいたもんだな。誰を捕り逃がした？」

理子の情報にも間違いがあつたか？

「あんたよ」

「な・・・。俺は犯罪者じゃないぞ！なんでカウントされてんだよ！」

「強烈したじやない！あんなケダモノみたいなマネしてしらばつくれるつもりー？このウジ虫ー！」

「だから、あれは不可抗力だつてんだろー！」

「つるせこつるせー！とにかくあなたと信ならあたしのドレイにで  
きるかもしないの！強襲科アサルトに戻ってあたしから逃げた実力をもつ  
一度見せなさいー！」

「あ、あの時は偶然だ。俺はEランクの　」

「ウソよーあんたの入学試験の成績Sランクだったー！」

そうきたか

「つまりあれは偶然じゃなかつたってことよーあたしの直感に狂い  
はないわー！」

「とにかく、今はムリだ！」

「今は？」

つてことは何か条件があるの？言つてみなさい。協力してあげるか

ら

無理だ！俺を性的に興奮させることはだぞー

「教えなさい、その方法ー！」

なりたくない。もひ、俺はあのモードになりたくないんだよーー

「・・・キンジ。一回だけならどうだ

ずっと黙っていた信が会話に混じってきた

「一回だけ強襲科に戻つてみればいいだろ」

「そり・・・だな。戻つてから最初に起きた事件を一件だけお前と一緒に解決してやる。それが、条件だ。」

だから転科じゃない。自由履修として強襲科の授業を取る。これでどうだ？」

「・・・いいわ。この部屋から出てつゝあげる。あたしも時間がな  
いし、その一件であんたの実力を見極めるわ」

「・・・どんな小さな事件でも一件だぞ」

「OKよ。そのかわりどんな大きな事件でも一件よ」

「分かった」

「ただし、手抜きしたりしたら風穴あけるわよ」

「ああ、約束する。全力でやつてやるよ」

通常モードのおれの全力でな

## 第7弾（前書き）

『オリキャラ設定』追加しました。

是非そちらも見てください。

## 第7弾

戻ってしまった。

強襲科アサルト、通称、『明日なき学科』に

「キンジ?」

「キンジだ・・・」

「キンジーお前は絶対帰つてくると信じてたぞー。」

普通なら素晴らしい会話が始まるだろ?。

だが、ここ(アサルト)は違う。

「ああ、キンジ。ここで一秒でも早く死んでくれ」

「お前に俺よりコンマ一秒でも早く死ね」

「キンジー、死にに帰つてきてくれたか! 武偵はお前みたい  
なマヌケから死んでいくもんだからなー!」

「じゃあなんでお前が生き残つてんだよ

死ね死ね言つのがここのは撫撲なのだ。

アリアはその様子を窓から覗いていた。

「・・・お前は行かなくていいのか？」

「いいのよ・・・。つて信！？あんたいつの間にいったのよー？」

「お前が中を覗きはじめてから。これ、『承諾書』

信はアリアに自由履修の承諾書を見せる。

「あんたも強襲科<sup>アサルト</sup>の授業取つたのね・・・。」

「不満そうだな」

「始めてパーティーを組まないと黙つてしまっていて結局パーティーを組むのが気になるだけよ」

「・・・二〇一の都合だ。」

「じゃ、今日は装備科<sup>アームド</sup>の授業あるから」

信が去っていくと同時にキンジが中から出ってきた。

「アリア、信と何話してたんだ？」

「信も強襲科<sup>アサルト</sup>の授業取つたって」

「信が！？」

「アイツってよく分からないのよね。教務科<sup>マスターズ</sup>に行つても大した情報なかつた。周りに聞いてもよく分からないつて」

「俺にも分からん」

それだけ言つとキンジは校門に向かつて歩き出す。アリアは直ぐにキンジの隣に来ると話し始めた。

「あのさキンジ」

「なんだよ」

「ありがとね」

「勘違いするな。俺は仕方なく強襲科<sup>アサルト</sup>に戻つてきただけだ。事件を解決したら探偵科<sup>インケスター</sup>に戻る」

「分かつてるよ。・・・でもさ強襲科<sup>アサルト</sup>の中を歩いているキンジ、みんなに囲まれててカッコよかつたよ」

本心なのか嘘なのかは分からないうがその言葉を聞いたキンジは戸惑う。

「あたしなんかここ（アサルト）では実力差がありすぎて誰も近寄つてこないからさ。・・・まあ、あたしは『アリア』だからそれでいいんだけどな」

「『アリア』？」

「『アリア』ってオペラの『独唱曲』って意味もあるんだよ。あたしはゼリーの武僧高でも一人ぼっちだった。」

「で、ゼリで俺をドレイにして『テコノット』にでもなるつもりか？」

「あなたも面白いこと言えるじゃないなー」

「どこが面白いんだろうか？」

「て言つた信忘れてない？」

「アイツはドレイつてこつ柄じゃないだろ？」

「やっぱりキンジ、強襲科アサルトに戻ったとたんこちよつと活き活きしだした。今の方が魅力的よ」

「そんなこと・・・ないつ」

やはり、さつきの言葉は本心だったらしい。再び似たような事を言われキンジは動搖する。

「俺はゲーセンに寄つていへ。お前は帰れ」

「ねえ『ゲーセン』って何？」

「ゲームセンターの略だ。そんなことも知らないのか」

「わからぬけどあたしも行く。今日は特別に遊んであげるわ。ご

褒美よ。」

「いりねえよ。そんなの『ご褒美』じゃなくて罰ゲームだろ」

キンジはアリアを振り切ろうと徐々にスピードを上げて行くがアリアもついて行く。最終的には一人とも全力疾走になった。

そんな一人の様子を後ろから信は見ていた。アムド装備科の授業があるといつのは嘘である。アリアの監視活動中。

(あいつらバカか? ゲーセンなんでもう大した距離ないだろ)

信は歩いて2分程で着いた。

信が着いた時には一人はUFOキャッチャーを始めていた。

「本気本気本気! !」

本気、本気と言つていてさつきから一向に取れる気配がない。

「どけ」

アリアをどかせてキンジがUFOキャッチャーに挑む。穴に近い物に狙いを定める

「キンジ見てーー! 取れてるー放したらタダじゃ おかないわよ!」

「もう俺にどうでもいいよー。」

そして、ぬいぐるみは一匹とも穴に落ちていった。

二人は喜んでハイタッチをする。

「あ」

一人は恥ずかしくなり目をそらす。

「ま、まあバカキンジにしては上出来ね！」

アリアの取り出したぬいぐるみにはレオポンと書かれていた

「かあーわあーいいー！」

「キンジ、一匹あげる。あなたの手柄だから」褒美よ

様子を見ていた信は電話を掛ける。

「ひらり信。神崎・H・アリア、遠山キンジ特に変わった様子なし」

「くふ、じ苦勞様。それから明日、バスに乗らないようにね。じゃ  
あね」

(明日・・・?何があるんだ?)

明日、大変な事が起きたるなど（一部を除いて）誰も知らない。

## 第8弾（前書き）

かなり時間が空いてしまいました・・・。楽しみにしていた方、すいませんでした。

更新再開です！

## 第8弾

「・・・」

俺、遠山キンジは携帯電話のアラーム音で目覚めた。

（・・・ああ。やつこも帰つたんだつけな）

最近はずっとアリアに邪魔されていたが今日は早く準備が出来た

（まだ少し時間があるな・・・）

おかしい・・・。俺はひょんとひょんと早めに家を出たのに

なんでもうバスが来てるんだ？

「やつた、乗れたーーおつキンジおはよー」

「のつ乗せてくれ、武藤ー」

「やつしたいがムリだーお前チャリでこいつ

「俺のチャリはぶつ壊れてんだよ」

「ムリなもんはムリだ！キンジ、男は思いきりが大事だぜ？」

武藤を乗せた満員バスはキンジだけを乗せず行ってしまった。

（くわつ、徒歩かよ。）

しづらへ歩いてこると電話が掛かつてきました。

「もしも」

「キンジ、今どい」

「・・・アリアか。今強襲科のそばだ」

「ちよつといわ。そこまで装備に武装して女子寮の屋上に来なさい」

い

「なんだよ。強襲科の授業は五時間目からだろ」

「授業じゃないわ。事件よー。」

事件。何だ・・・何が起きたんだ。できれば小さな事件であつ

てほしい

キンジは武装し終えると女子寮の屋上に来た。

「レキ・・・」

アリアめ転入生のくせにいい駒が分かつてゐるな

「信もか・・・」

「もう一人くらいのランクが欲しかったところだけど他の事件で出払つてるみたい。4人パーティーで追跡するわよ」

「追跡つて・・・何をだ。ブリーフィング状況説明くらいくちんとしり」

「バスジャックよ。武偵高の通行バス、あんたのマンションの前にも7時58分に停留したハズのやつ」

(あのバスが乗つ取られたつていうのか?あれには武偵高のみんながスシ詰め状態で乗つてるんだぞ!)

「犯人は車内にいるのか」

「分からぬけどたぶんいないでしょうね。バスには爆弾が仕掛けられてるわ

爆弾・・・

「キンジ、これはあなたの自転車をやったヤツと同一犯。『武偵殺し』の仕業だわ」

「でも『武偵殺し』は逮捕されたハズだぞ」

「それは真犯人じゃないわ」

「・・・なんだって? ちょっと待てお前は何の話をしているんだ」

「おかしい。この話はあちこちおかしい

「背景の説明をしてる時間はないしあんたには知る必要もない。このパーティーのリーダーはあたしよー。」

「リーダーならリーダーらしくしっかり説明しろよー。」

「・・・余計な事は考えるな。今は事件のことだけ考える」

「でもなあ

キンジの言葉を遮るようにぐつ「パートナー」がやつて来た。

「ああやるよー。せつやっここんだろー。」

「これが約束の最初の事件よ。一人共ちゃんと本気を出しなさい」

「ああ」

「言つておぐが俺にはお前が思い込んでこるものうな力は無いんだぞ。ブランクも長い」

「問題ないわ。万一ピンチになるようだつたらあたしが守つてあげるわ」

4人はヘリコプターに乗り込む。

「見えました」

しばらく乗つているとレキがバスを見つけた。

「空中からバスの屋上に移るわよ。あたしはバスの外側をチェック。キンジと信は車内で状況を確認。レキはヘリでバスを追跡しながら待機」

3人はバスの上にパラシュートで降りる。

キンジは窓を叩き窓を開けてもらい中に入る。後に続き信も車内に入り込む。

「キンジーあの子の携帯が」

武藤が指差した少女の携帯が喋り出していた。

『速度を落とすと爆発しやがります』

信はインカムからアリアに状況を報告する

「アリアか、やはりこのバスは遠隔操作されてる。そつちはどうだ

「爆弾らしきものがあるわ！」

「カジンスキーバ型のプラスチック爆弾か？」

「ええ、そうよ。見えるだけでも炸薬の容積は3500立方cmはあるわ！」

「潜り込めるか？」

（たかがバスジャックにやりすぎだろ・・・）

「今から」

突然、バスに衝撃走る。

キンジは窓から体を乗り出し後方を見るとルノーの助手席にセグウェイが座っていた。

「みんな、ふせろっ！…！」

キンジが叫んだと同時にセグウェイは乱射し始め窓ガラスの破片がバス内に飛び散る。

運転席を覗くと運転手は氣絶していた。

（被弾している・・・）

『有明コロシアムの角を右折しやがれです』

「武藤！運転を代われ！減速させるなー！」

キンジは武藤にヘルメットを渡す。

バスは有明「ロシアムまでやつて來た。

「カーブするぞ！みんな左に寄れ！…」

(生徒たちを左側に集めて重心を保つたのか)

キンジがバス屋上に上ると同時にアリアも車外下から上がりつて來た。

「アリア、ヘルメットはどうした？」

「さつきルノーに追突された時にブチ割られたのよー。あんたこそどうしたのー。」

「運転手が負傷して、今武藤にメットを貸して運転させてるんだ」

「危ないわ！…じつして無防備に出てきたの！なんでそんな初步的な判断もできないのよー。すぐ車内に隠れ」

アリアの皿にはキンジを狙うセグウェイが映った。

「後ろつ、伏せなさいよー何やつてんのバカつ！…」

「え？」

アリアに言われキンジはようやく気づいた。

死んだ

キンジは死を覚悟した。しかし、撃たれたのはキンジではなくアリアだつた。

アリアは額から血を流しその場に倒れ込む。

「アリアーーー！」

キンジはひたすら名前を呼ぶ。

「アリアーーー！」

この直後に2発の乾いた音が響く。

その音と共にルノーは退きコントロールを失い後方で壊れた。

「私は一発の銃弾」

「レキ……」

「銃弾は人の心を持たない。故に何も考えない。ただ、目的に向かつて飛ぶだけ」

レキの放つた一発の銃弾は車外下に付いていた爆弾を飛ばした。

飛ばされた爆弾は海に落ち、爆発し大きな水しぶきが上がった。

バスは次第に遅くなりやがて止まつた。

「任務完了……」

信は携帯電話に向かって静かに話した。

## 第9弾（前書き）

アクセス1万超えました＼＼＼＼＼！

## 第9弾

俺、遠山キンジは今、アリアの病室前にいる。

ドアの隙間から覗くとアリアは手鏡を持っていた。何を気にしているかは分かる。

俺が付けてしまった額の傷痕だ・・・。

「アリア」

そう言い俺はドアの前に戻りノックをする。

「あ、ちょ、ちょっと待ちなさい」

何やらもの凄い物音がしてくる。

「いいわよ」

「お見舞い？ケガ人扱いしないでよ」

「レッキとしたケガ人だろ。その額の傷・・・」

「傷が何だつていうの？なにジロジロ見てるのよ」

「いや…その、それ、痕が残るんだろ」

キンジが中に入ると手に持っていたものが鏡から拳銃に変わった。どうやら、整備をしているらしい。

「だから何？別に気にしないわよ。あんたも気にしなくていい」

「アリアはやつらと整備していたガバメントを棚の上に置く。

「あたしは武偵憲章にしたがつただけよ」

「武偵憲章だなんて・・・。そんな、キレイ事をバカみたいに守るなよ」

「・・・あたしがバカだつていうの？キンジの分際で

でも、そうね。こんなバカを助けたあたしはバカだったのかもね」

ちよつと間を置きキンジはビニール袋を取り出す。

「・・・ももまん？」

「食えよ。5つ買つてきた」

アリアは少しへいーール袋とにらめっこするとすぐさまキンジから袋を奪い去りももまんを食べ始める。

「ゆつくつ食えよ。ももまんは逃げていかない」

「うむふあい。あたしの勝手でしょ」

「・・・まあ、食べながら聞け。あの後、犯人が使っていたホテルの部屋が見つかった」

「・・・宿泊記録は？」

「ない。というか、宿泊データが外部から改竄されてたんだ」

鞄から取り出した調査書をアリアに向かつて投げる。

「峰理子を中心に探偵科インケスタと鑑識科レピアに部屋を調べてもらつたよ

が、犯人像に繋がるような痕跡は何一つ見つからなかつた」

「でしううね。『武僧殺し』はケタ外れに狡猾なヤツよ

この会話を覗き込む人物が一人いた。

もちろんのことながら信である。

そして、その後ろにもう一人の人影。

「・・・黙つて後ろに立つなよ。・・・レキ」

「信さん、お見舞いですか」

「ああ、だけどこの空気じゃ入りづらくて。お前も見舞いか?」

「いえ。私はあなたに用があつて来ました」

信は一瞬ドキッとした。レキとは余り話した事もなくせいぜい名前を知っていたぐらいだ。そんな人物から話・・・。おそらくバスジヤックに関してだろう。

「・・・俺に何の用だ？」

「信さん、あなたは『武偵殺し』もしくは『武偵殺し』に関わっている人物ですか」

单刀直入すぎないか？

「何を根拠にそんなことを言つんだ」

「アリアさんが爆弾を見つけた時にあなたは口走ってしまった。『潜り込めるか』と。あの時、アリアさんは爆弾が車外下にあるとは言つていません」

「・・・・・」

「安心してください。アリアさんやキンジさんにはこの事を言つません。ですから」

レキの言葉を遮り信は話す。

「今は・・・まだ、言えない・・・」

それだけ言つと信はレキの前から足早に立ち去る。

(レキにバレちました・・・。言わないと言つていたが・・・。次で失敗したら『あいつ』が・・・)

次の『ハイジャック』で勝負を決める

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9179y/>

---

緋弾のアリア～灰色の武偵 鎌鼬～

2012年1月13日17時49分発行